

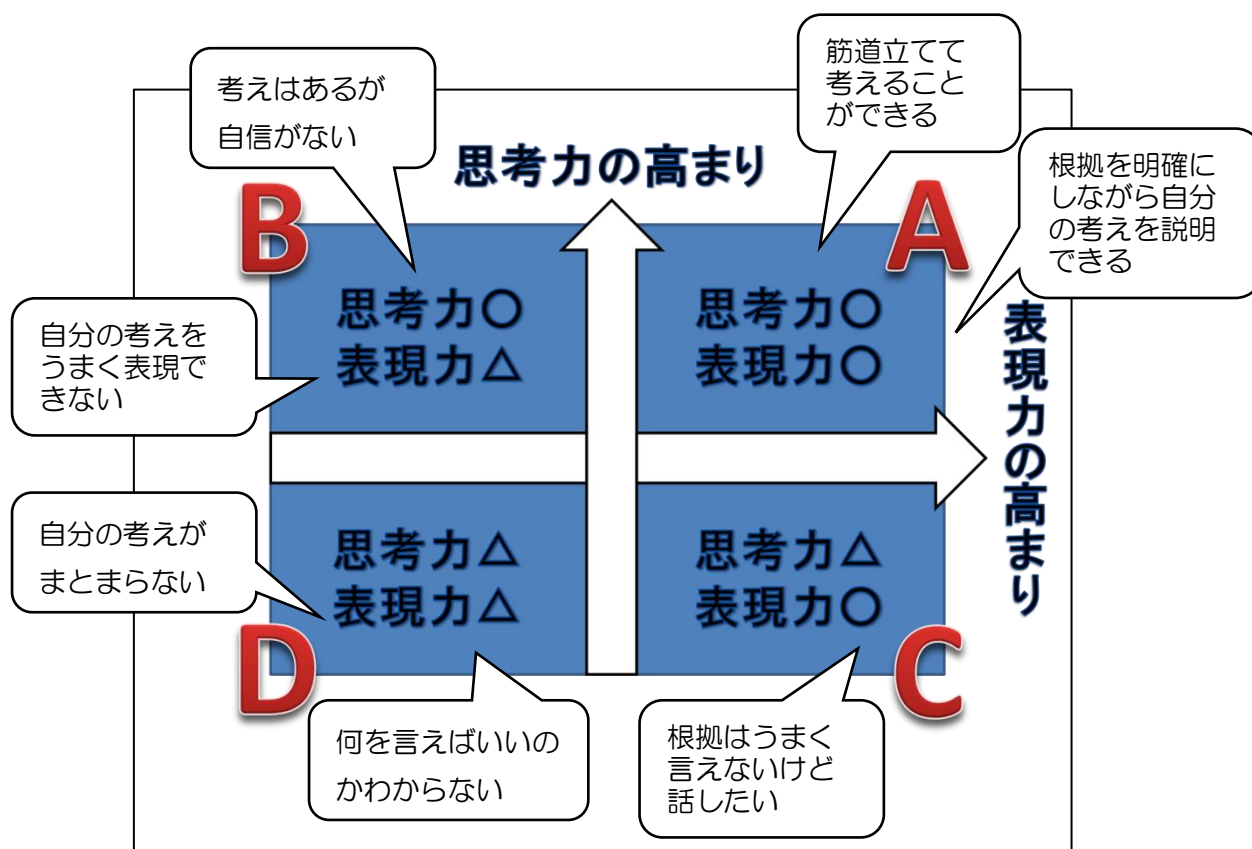
～本年度の研究の方向性について～

1 主題・副主題

「思考力・表現力を育成する学習指導の在り方」
～お互いの思いや考えを伝え合う対話活動を通して～

2 本校の課題から（令和3年度学力向上プランより抜粋）

- 目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめを書くことが苦手
- 資料の特徴や傾向を関連づけて、理由を記述することが苦手
- 人の話を聞くと、その人の言いたいことや気持ちを考えて聞く力の不足
- 自ら進んで情報を集めようとする態度の不足



3 主題・副主題の意味

(1) 主題の意味

○「思考力」とは

根拠を明らかにしながら筋道立てて考え、相手の考えを生かしながら自分の考えを深めていく力

○「表現力」とは

相手の考えを理解し、その考えと関連させながら相手にわかるような表現方法を使って書いたり話したりして伝える力

(2) 副主題の意味

○「お互いの思いや考えを伝え合う対話活動」とは

多様な思いや考えをもった児童が仲間と協働して課題解決に取り組み、対話を通して自分の考えを深めていくこと

(3) 目指す子ども像

<低学年>

主体的に問題解決に取り組み、自分の気付きや考えを伝え合うことができる子

<中学年>

主体的に問題解決に取り組み、対話を通して互いの考えのよさに気づくことができる子

<高学年>

主体的に問題解決に取り組み、対話を通して互いの考えを深め合うことができる子

3 研究の目標

学習過程において、児童の思考力・表現力を育成するために、お互いの思いや考えを伝え合う対話を中心に据えた学習活動を仕組むことの有効性を明らかにする。

4 研究の仮説

学習過程において、お互いの思いや考えを伝え合う対話を中心に据えた学習活動を仕組めば、他者とのかかわり合いの中で主体的で対話的な学びを引き起こし、思考力・表現力を育成することができるであろう。

【着眼1】

学ぶ必然性があり、意欲が高まる課題設定の工夫

- ・実生活や既習事項と学習を結びつける導入の工夫
- ・児童の主体性を促し、児童自ら課題として設定できるような問いの工夫

【着眼2】

対話活動を活性化させる手立ての工夫

- ・ICT機器の活用
- ・エキスパート資料の工夫
- ・それぞれの資料を図や表、言葉で表し、交流し合う場の設定
- ・グループの考えの可視化により、比較・検討する中で新たな課題を見出す場の工夫

【着眼3】

対話を支える「話す・聞くスキル」の向上

- ・系統立てた「話し方・聞き方」の設定
- ・発表、話し合いの仕方マニュアルの設定
- ・「話す力・聞く力」の学年別目標の設定

5 研究の方法

(1) 研究授業

○公開授業について

- ・2学期に指導案に沿った知識構成型ジグソー法を取り入れた授業を全職員が行う。
- ・指導案の形式については別途提案。教科・領域は自由。
- ・基本的に学年で同一単元（題材）の授業を行う。

○全研について

- ・全研は低学年（1～3年）、高学年（4～6年）から1クラスずつ実施し、全体で事前研修・検証授業・事後研修を行う。
- ・全研の場合は、授業の対話記録をとる。（対話記録は近接学年＋研推委員）

○部研について

- ・部研は低学年部、中学年部、高学年部から1クラスずつ実施し、管理職、研修部、部会メンバーが参観する。参観の前に指導案を検討し（参観の視点の確認等）、参観者で事後研修を行う。
- ・部研の場合は、抽出する班を選び、対話記録を行う。
- ・授業後には必ず事後研修（協議会）を実施し、記録を提出する。

○指導案について

- ・夏休みに各部会を実施し、指導案作成および指導案審議を行う
※実施希望日、単元等が決まり次第、研修部に報告する。

(2) 検証方法

児童の思考力・表現力の高まりを検証するために、「事前・事後アンケート」「事前・事後の課題解決シートの変容」「学習の振り返り」「ワークシート」「担任や参観者による子どもの発言や様子の記録」などをデータとして、児童の変容を具体的・客観的に分析し、実践のまとめを作成する。